

<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">~2022</div> ソーシャルワーク演習	単位数	履修方法(授業形態)	配当学年
	2単位	SR(演習)	1・2年
	担当教員	田中 尚	

■授業のテーマ

ソーシャルワーカーの実践力の向上及び実践環境の構築とそのために必要とされるソーシャルワーク理論

■授業の目的

ソーシャルワークの実践理論・モデルと実務・実践活動を結び付け、理論・モデルに基づく対象把握、実践への適用(応用)について理解する。

■授業の到達目標

1. 3つの対象レベル(個人・組織・地域)において、ソーシャルワークの実践理論に基づき、対象の統合的な理解・把握、アセスメントができる。
2. ソーシャルワークの理論・モデルと結び付けて、自身の実践の計画・振り返り・改善を行う。
3. エコマップ等、視覚でとらえ、説明し、相手の理解が得られるよう、カンファレンス等で使えるためのツールを身につけることができる。

■授業の概要

ソーシャルワークの実践力の向上と人材育成は、一般的な「福祉教育」、教育機関による専門教育、実践現場での研修やスーパービジョンなど、重層的に行われているが、ソーシャルワーク分野は、従来の福祉六法の範囲はもちろんだが、新たな分野にも広がりを見せており、それらの領域での人材不足は実践現場で深刻な問題となっている。ここでは、学生それぞれが自身の関心分野・領域を定め、それについて文献等の調査を行い、実践力の向上と人材育成に焦点を当て、その歴史的経緯を検討し、また、他国や他分野との比較を試み、ソーシャルワーク実践の課題を考察する。さらに、ソーシャルワーク理論やその価値とするところを確認し、実践上の現状とその課題を検討する。検討の枠組みとしては、ソーシャルワークの実践力の向上と人材育成の実践に使用する知識・技術の基盤となる自我心理学、認知・行動理論やエコシステム論など、ソーシャルワークの主要理論の適用などを検討する。ジェネラリスト・ソーシャルワークの理解を踏まえて、ミクロ・メゾ・マクロの各視点からのソーシャルワーク実践の理解を深め、価値を生み出すキーワードとして、社会構成主義の観点を取り上げ、実践を批判的に分析することを行う。

■スクーリング事前課題(学修時間目安:10時間以上)

- 1) エコロジカル・システム理論、社会構成主義理論、認知行動理論のそれぞれについて学修し、それらのソーシャルワーク実践への適用について、身で調べたことをそれぞれ1,000字程度にまとめる。それぞれ1,000字程度であるため、全体で3,000字程度とする。(同時双方向または対面の演習の1週間前に提出)

■スクーリング授業計画(状況に応じて会場ではなくリモートで実施します)

	授業の内容	授業の方法
1	社会福祉実践および実践研究の基本的考え方	オンデマンド
2	ソーシャルワークの全体像の把握と確認①エコロジカル・システム理論	オンデマンド
3	ソーシャルワークの全体像の把握と確認②社会構成主義理論	オンデマンド
4	ソーシャルワークの全体像の把握と確認③認知行動理論	オンデマンド

	授業の内容	授業の方法
5	ソーシャルワーカーの育成（実践力の向上と実践環境）①事例研究	オンデマンド
6	ソーシャルワーカーの育成（実践力の向上と実践環境）②組織研究	オンデマンド
7	ソーシャルワーカーの育成（実践力の向上と実践環境）③システム研究	オンデマンド
8	ソーシャルワーカー育成の歴史・制度	オンデマンド
9	ソーシャルワーカーの実践力向上①事例分析	対面
10	ソーシャルワーカーの実践力向上②組織分析	対面
11	ソーシャルワーカーの実践力向上③地域環境分析	対面
12	ソーシャルワーカーの実践力向上④制度・システム分析	対面

■スクーリングの事後課題

課題 1 (事後課題)	ソーシャルワークの理論とその実践における課題、実践上のジレンマ（ジレンマへの対応を含めて）について考察する。レポートは原則として論述式、解答の長さは4,000字程度とする。
----------------	--

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス

授業の到達目標、概要などを読んで、レポートで取り組む内容をできるだけ絞ることが大切です（広すぎると与えられた文字数では、学部教科書レベルの内容をまとめただけになってしまいます）。また、大学から送られてくる参考文献だけでは求められるレポートの質に到達することが困難であるため、自身の関心に従ってレポート課題（テーマ）に関する文献を探し出す努力が必要です。大学からの参考文献は、そのためのガイドとして考えてください。

■評価の方法・基準

- ・事前課題レポート（25%）
- ・全スクーリング（50%）
- ・事後課題レポート（25%）

■参考文献（*印=大学から送付される必読図書）

- 1) 一般社団法人日本社会福祉学会編集（2012）『対論 社会福祉学 5 ソーシャルワークの理論』中央法規出版。
- * 2) 久保紘章・副田あけみ（2005）『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店。
- 3) 日本社会福祉学会機関誌（最新版）『社会福祉学執筆要領「引用法」』（コピー）
- 4) 伊藤淑子（1996）『社会福祉職発達史研究：米英日三カ国比較による検討』ドメス出版。
- ※ 4) の図書は、新品在庫僅重版予定無しのため配本できませんが、非常に大切な内容ですので、中古を入手する、または図書館で借用するなどしてお読みください。
- 5) 好井裕明（2006）『「当たり前」を疑う社会学』光文社新書。
- 6) Schon, D. (1984) The reflective practitioner: how professionals think in action, Basic Books. (=2001, 佐藤 & 秋田訳『専門家の知恵』ゆみる出版.)
- 7) 小池和夫編（2006）『プロフェッショナルの人材開発』ナカニシヤ出版。
- 8) Polanyi, Michael (1996) The tacit dimension. Routledge & Kegan Pau. (=1980. 佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊国屋書店.)
- 9) 金井壽宏（2012）『実践知』有斐閣。
- 10) Gergen, K. (1999) An invitation to social construction, Sage. (=2004, 東村知子訳『あなたへの構成主義』ナカニシヤ出版.)
- 11) Flick, Uwe (1995) Qualitative forschung. (=2002, 小田他訳『質的研究入門』春秋社.)

- 12) 平山尚他 (1998)『社会福祉実践の新潮流』ミネルヴァ書房.
- 13) 太田義弘 (1992)『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房.
- 14) 遊佐安一郎 (1984)『家族療法入門：システムズ・アプローチの理論と実際』星和書店.
- 15) Toseland, R & Rivas, R. (1998) An introduction to group work practice (=2003, 野村豊子監訳『グループワーク入門』中央法規出版.)
- 16) Obholzer, A. & Roterts V. Z, (2006) The unconscious at work: individual and organization stress inhte human services, (=2014, 武井麻子監訳『組織のストレスとコンサルテーション』金剛出版.)
- 17) 高良麻子 (2017)『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル』中央法規出版.
- 18) Goldstein & Noonan (1999) Short-term treatment and social work practice. Simon & Schuster, inc. (=2014, 福山和女他監訳『総合的短期型ソーシャルワーク』金剛出版.